



OVERSEAS

Mozambique —モザンビーク共和国—



海外事情【寄稿】

モザンビーク共和国との出会い



後藤 伸一 GOTO Shinichi
株式会社建設技術研究所
地球環境センター/主任

モザンビーク共和国はアフリカ大陸南東部に位置し、南に南アフリカ共和国、南西にスワジランド、西にジンバブエ、北西にザンビアとマラウイ、北にタンザニアと国境を接し、モザンビーク海峡を挟んで東にマダガスカルとコモロが存在する。人口約2,392万人の沿岸国の面積は、79.9万km²と日本の約2.1倍。公用語はポルトガル語で、ビジネスや教育の場では広く英語が使われている。キリスト教とイスラム教の信者が多く、地方の集落では教会とモスクが並び建つ姿も目にした。

今回、この国の国際回廊(国と国をつなぐ移動経路)周辺における基礎情報(主にエネルギー)収集業務に参加した約1.5カ月間の体験を中心に、現地で感じたことを書いてみようと思う。ちなみに、現地滞在中は常に「ホテル暮らし」であり、食事は主に「レストラン」であったため、地元の人たちの暮らしとは異なる点にご留意頂きたい。

まちな印象①(首都マプト編)

モザンビークへの入国経路は、成田→ドバイ(アラブ首長国連邦)

→ヨハネスブルク(南アフリカ共和国)→マプト(モザンビークの首都)で、ドバイでの5時間のトランジットを含めて約30時間かかった。新婚旅行以外で初の海外渡航となる私にとっては、かつてない大移動。機内では資料を読んだり映画を観たりと空の旅を満喫していたのだが、さすがに体はぐったり。ドバイ空港のビジネスラウンジでくつろぐ上司に恨めしい目を向けたことは言うまでもない。



写真1 ホテルの窓から眺めた首都マプトのまち

さて、首都マプトに降り立ったのは夜9時。まちの様子は、ポルトガル統治下に建設された高層ビルや西洋風の建築物が建ち並び、1階の店はショーウィンドーがきらびやかだ。でも、どこかちょっとおかしい。ふと見上げると、2階以上の部屋が真っ暗な建物が目立つ。ここだけ見れば「廃墟」のようだ。外見的にはまだまだ見えそうな建物が多いのだが、設備の維持管理が行き届かず、水道や電気設備

が壊れて住めなくなってしまっているようだ。滞在先のホテルでもエレベーターが頻繁に止まり、そのたびにメンテナンス会社が駆けつけるのだが、またすぐ止まる。ついには「エレベーター見張り係」が登場。4人で乗ろうとすると、「4人以上はダメだ!」と必死の形相で制止された。もしそのまま乗っていたらどうなっていたのだろうか…。

マプト市内では、あちらこちらでビルの建て替えが始まっており、建設ラッシュが起きそうな気配も感じられた。天然ガス産出などの恩恵を受けた急速な経済成長を背景に、数年後にはまちの様相は一変しているかもしれない。

続いて目についたのは、ポルトガルの影響を色濃く残す建築物ではなく、陽気なモザンビークの人々でもなく、初めて見る珍しい植物でもなく、「大量の車」。それも、その多くが日本車なのである。日本と変わらないラインナップで、ビッツ、カローラ、マーチ、パジェロ等、何でもある。後日、現地関係者の自家用車で送迎して頂く機会があったのだが、待ち合わせ場所には、「あれ?親父?」とおかしな気分であった。ただ、どんな高級車であっても、多くの車は「ガラスにヒビ」が入っている。機械部分や外装・内装は地元の車屋でも何とか入るが、ガラスだけは交換部品が手に入らず、何ともならないらしい。ちなみに、これだけ大量の自動車走っていても、大気汚染は全くと言って良いほど感じない。やはり、日本車は優秀なのだ。

まちな印象②(ナンブラ編)

首都マプトで関係者との協議を終え、今回の調査対象地であるナンブラ州に移動。州都ナンブラは



写真2 州都ナンブラのまち



写真3 ナンブラ郊外の農村

人口50万人を超えるモザンビーク第2の都市であり、モザンビーク北部の経済の中心地である。国際回廊であるナカラ回廊が東西を走り、世界遺産の「モザンビーク島」がある。首都マプトとは大きく様相が変わり、高層建築物は数えるほどであり、車で15分走れば農村地帯になる。

我々の活動のベースとしていたナンブラのホテルはとても快適。冷房も効くし、シーツもぱりっとして、水洗便所やトイレトペーパーもある。不便と言えば冷蔵庫がないこと。そして蛇口から出る水が黄色いことだけ。アフリカ初心者でも日々快適な生活であった。

治安の悪さもあまり感じず、緊張感はあるものの昼間は散歩もできる。ただ、警察官がクセモノ。街行く外国人に無理難題を言っは賄賂を要求するらしい。

滞在中の日々の暮らし

日々の暮らしでは、マプトでもナンブラでも物価が高いことに驚かされた。もちろん、我々が利用していたホテルやレストランは、外国人や地元富裕層向けであり、もともと高いのだが…。2010年のサッカーのワールドカップ南アフリカ大会、そして2011年のモザンビークで行われたアフリカ競技大会の2つのビックイベントが物価を押し上

げた。ホテルなどはこの数年で宿泊料を2~3割値上げしたらしい。

我々の普段の食事はもっぱらレストラン。ポルトガル料理風が基本で、肉や魚介のメインに、サラダとフライドポテトがワンプレートに入っている。海に面している国なので、海老などの海鮮類が美味であった。そのほか、都市部であれば中華料理、インド料理、ベトナム料理、何でもある。マプトには「スシバー」まである。ちなみに、「HAKO(握り)」と「MAKI(巻き)」があって、ネタはサーモンと海老が主流。

農村部の多くの家ではニワトリを飼育しており、卵や肉は晴れの日のご馳走となる。普段はパンやシマ(トウモロコシの粉から作る蕎麦掻のようなもの)を主食として、キャッサバの芋や葉、甘くないマンゴーなどを食べている。湿潤な地域では米も食べる。パンはポルトガルの影響を受けているため、どこへ行っても美味しいものが手に入る。

いつものように、ナンブラ州の農村へ調査に行ったある日のこと。調査を終え車に戻ると、すぐ近くから「コッココッコ」ニワトリの鳴き声が聞こえる。別に珍しくもないのだが、やけに近い。バサッと羽ばたく音まで聞こえる。ふと後ろを振り向くと、いました、トランクルームの中に。ドライバーさんがこの集落に住む知り合いから譲り受けたとのこと。彼は満面の笑み

で「今日、食べるんだ!!」。当たり前のことなのだが、普段スーパーでバック入りの肉しか目にしていない私にとって、ちょっと複雑。彼女(ニワトリ)とは、帰途の2時間、一緒にドライブを楽しんだ。

現地でのトラブル

ちょっとしたトラブルは、生活のほどよいスパイスになる。滞在中の数あるトラブルの中から2つほどご紹介する。

ナンプラ州は首都マプトから1,000km以上北に位置し、赤道に近いことから、夏はスコールのような突発的な大雨が降る。雨が降り始めると、石鹸を片手に家から飛び出してくる人もいる。そんないつもの大雨のなか、ホテルで仕事をしていると、どこからか滝のような水の流れる音が聞こえる。部屋をウロウロすること数分、ついに音源を発見。何と、壁の中から聞こえてくる。私の部屋は角部屋ではない。壁の中を、激流のように水が流れているのである。そして翌朝、いつものとおり2階のレストランに向かうと、2階フロア全体が10cmほど浸水していた。屋上の亀裂から浸入した大量の水は、どうやら私の部屋の壁の中を伝って1階ではなく、なぜか2階に溜まったようであった。

また、ナンプラ州に滞在中、非常に大きなサイクロンがモザンビークを縦断した。土砂崩れや河川の増水等により、各地の道路が寸断され、橋が流されるなどの大きな被害があった。その数日後、山間部の集落に調査に出かけたところ、唯一のアクセス道路の橋が流されており立ち往生。当然調査中止かと思いきや、同行していた現地の行政職員が俄然張り切って、車の渡河ポイントを探し始めたの



写真4 一緒にドライブを楽しんだ彼女



写真5 橋が流されていた道

である。ランドクルーザーが如何なく実力を発揮し、我々の渡河作戦は大成功を収めたのだが、話のオチはその翌日。翌日も遠方まで調査に出かけたのだが、途中、焦げた臭いとともに車がスローダウン。ついには完全に停車し、うんともすんとも言わなくなってしまった。渡河の際、車の底面に傷ができ、そこから冷却水が漏れ出した挙句のオーバーヒートである。さて、ここからは地元の人々にとってはお祭りである。マヌケな日本人一行を一目見ようと、人だかりができていた。

月並みだが、幸せって何?

首都マプトでは、アパートに住み、自家用車やテレビを持ち、ビシッとスーツで毎日出勤する人をよく見かける。携帯電話(プリペイド式)の普及率は高く、英語でコミュニケーションを取り、バーでビールを飲む姿もごく当たり前である。しかし、国全体で見れば、国民一人当たりのGNI(国民総所得)は157カ国中150位であり、最貧国に位置付けられる。ちょっと都市から離れれば、天水でキャッサバとトウモロコシを育て、日中は日陰でゴロリ。電気、水道、ガスなどのライフラインは一切無く、無駄な体力消費を避け、最低限のエネルギーで生活している。そんな自給自足の国民が7割以上を占めると言わ

れている。

この生活様式の違いを「格差」と呼ぶかどうか、私には大きな迷いがあった。その背景には、都市生活者である「私自身」が本当に幸せかどうか、確信が持てなかったことに起因する。生活が不便であっても、食事が少なくても、教育が十分でなくても、それに代わる「幸せ」があるのではないかと、心のどこかで感じていたのだ。

しかし、この認識が大きく変わる出来事があった。調査の一環で、海にほど近い集落の「主に分娩を行う保健所」を訪れたことである。青い空、白い雲、白い砂、写真で見るとちょっとしたリゾート地のコテージのようである。しかし、一歩足を踏み入ると、そこは冷たいコンクリートの床に、粗末なベッドが4つ。唯一の設備は「蚊帳」であり、それ以外は何もない。これが入院室であり、分娩室もそう大差はない。本当に「何もない」のである。この施設は、かろうじて太陽光発電により照明がいくつか点くが、システムの半分はすでに稼働しておらず、切れている電球も多い。夜はお互いの顔が判別できる程度の明るさしか確保できていないはずである。

ここで「子どもを産む」のである。私自身、1歳半の娘(当時)がいて出産の記憶が新しかったこともあり、急に激しい「心細さ」に襲



写真6 主に分娩を行う保健所



写真7 保健所の室内

われたのである。もし、自分の妻がこの保健所に運び込まれたら、もしそれが夜だったら、もし出血が止まらなくなったら、もし未熟児だったら、もし…。際限なく悪いイメージが湧いてくる。設備の整った「病院」に行きたくても、未舗装道路のはるかかなた100km先であり、自家用車もない中では到底間に合うとは思えない。実際、乳児死亡率は約9%、妊産婦死亡率は5%との統計データもある。統計から漏れている事例も多く、実際はもっと高いと思われる。

ここまで考えて、はたと気付いた。大切な人の「命」の心配をせずに暮らせることは、何と「幸せ」なことなのかと。これだけで、自信を持って「自分は幸せである」と断言できるということ。

モザンビークの人々が、命の心配をせず、安心して我が子の誕生

を待ちわびることができるような、そんな「幸せ」な社会が来ることを願ってやまないし、技術者として、少しでも貢献したいと強く感じさせられた場面であった。

持続可能な発展に向けて

マプトやナンプラなどの都市部では、日用品、食料品、家電製品、衣料品など、質を問わなければ何でも手に入る。農村部でも、幹線道路沿いであれば露天や市場で大抵のものが手に入る。しかし、そのほぼ全ては中国製やインド製などの他国からの輸入品である。お土産を探すついでに「モザンビーク製」を気にかけていたのだが、見つけられたのはビールと民芸品くらいであった。また、携帯電話は恐ろしいほどのスピードで国の隅々まで行き渡り、まるで自らの縄張りを主張するかのよう

携帯電話会社の名前がそこかしこに大書されている。このように、地場産業が育つ余地がないほどに、国外の製品やサービスが大挙して押し寄せており、すでに止められないほどの大きな流れとなっているように感じられた。

「世界」を見る目に全く自信のない私ではあるが、このような状況に一抹の不安を感じる。無秩序な経済的な侵略と言っても良い状況が、この国の自立への道筋を妨げることになりはしないかと。この先、どのようにして国民主体の持続可能な発展に移行していくのか、その行く末を注意深く見守りつつ、技術者としてできることを探していきたいと思う。

若手の皆さんへ

今回の業務を通じて、建設コンサルタントの活躍の場が、地域や分野にとらわれることなく、無限に広がっていることを実感できたことは、非常に大きな収穫であった。特に若手の皆さんには、是非一度、体験して頂きたい。現地滞在中の何とも言えない浮遊感と高揚感はクセになること請け合いです。



写真8 笑顔いっぱいの子供たち



写真9 道路沿いの露天商